西遊夢錄（三）

瀧川規一

(III) 蘇國豪族一門の服裝

蘇國に旅行するものは勿論のこと、年々倫敦市内のオリンピアで行はるゝ軍隊演技を見、ウェムレイ博覽會で軍隊夜間分列行進を見物した人は蘇國軍人の服裝が特に異彩を放つて居ることに注目する。これ等の服裝の異樣なるに氣がついた人々はその服裝の何を意味するかを必ず問ふのである。

彼等の服裝の縞柄の派出なる、而かも縱横縞の縞柄と色との千種萬樣なるに細心なる觀覽者は不審の眼を注ぐのであるこんな疑問を前提として蘇國高地人の服裝のことを述べて見たい。

今日吾々旅行者が見る高地人の服裝は決して古代ゴール人が侵入し來りし當時のものをその儘踏襲し來つたものでないことは、今日の和服が數百年以前其儘のものでないと同じである。種々進化の道程を經て來た結果であることは言を俟たないのである。一六〇〇年以前は蘇國及び愛蘭のゲール人はサフロン色の背丈け一杯の大きなシャツを着、その上に膝まで達する厚毛布を恰も僧侶の衣のやうに被つてゐたのだと云ふ。十六世紀に佛王に仕へてゐた世界風土記學者の記する處はさうであるが、今日普段着として男子が着てゐるものが吾々の眼には抑も變に見える。女子が着て居る可き程の色めいた縞柄の袴を腰から膝まで着けてゐる。二色の毛糸にて織りなさせる綾織の織地ツゥイドにて作れる胴衣を着けてゐる。ボタンは貝ボタンでなくて角製のボタンである。何れも頑丈な brogs と呼ばるゝ短靴を穿つて居り、平あみにあんだ長靴下をはきガータを着けてゐる。帽子も亦蘇國人特有の帽子であつて Balmoral 帽の型だと人は云つてゐる。小供の着けるニッカーのやうに膝頭を少し外にのどかせてゐることも變に思へる。短袴のことを Kilt と呼んでゐるが、決してズボン吊りや革帶でもたせることをしてゐない、必ず帶で腰の周圍にくゝりつけてゐるのである。この袴の着け具合は跼いて袴の裾が辛うじて地に着くか着かぬ位に穿くのが上手な着方だと云ふ。從つて下の hose と呼ばるゝ長靴下と袴との間から兩脚の膝頭以下が少し露出するのである。まだその上に小供げておかしく思へるのは袴の前面に一つの袋をぶら下げて居ることである。この袋は sporran と呼ばれてゐるが十中八九まで革製のものであつて、往々狐や狸などの獸の頭をその儘使用してゐることがある。時には格子縞の長さ四ヤル巾一ヤル半でふさ緣つきの毛布めいたものを被つて居ることもあれば、時には肩被ひの Highland cape と稱せらるゝものを上

體に着てゐることもある。また時には上述の袴の縞柄が特種の一族を表象する縦横の色縞で tartan kilt と呼ばるゝものと二色撚糸の綾織ツウィドのジヤケツに胴着丈けを着けてゐるものもある。何れにしても派手な人目を惹くに足る服裝であり、まだその上に右脚の外に靴下に Sgian dubh と云はるゝ裝飾めいたものをつけてゐる。大の男がこんな裝飾たつぷりの服裝を着けてゐると何だか見戲に類する感じがする。余が Hamilton 市の公園内で觀る機會を偶然に得た小供によつて組織されてゐる蘇國の音樂隊の演奏者の服裝が悉くこのタータン、キルトの盛裝であつた。盛裝の多くの小供が各樂器を或は手にし或は肩にして吹奏鼓鳴の賑やかな音につれて分列行進を續ける時の華やかさ賑やかさ可愛さは今も忘れることの出來ない印象である。

一見ごちや〳〵複雜を極め裝飾めいて居る丈けに蘇國人に聞くとこみ入つた形式があつてその説明を聞くだに煩はしい程な六つかしさがある。殊に各豪族に隷屬することを表象する一門の盛服となると、方今諸國で行はるゝ大禮服以上の面倒さがある。

然しそれでも何のことはない breacan-féile と féile-beag との二つが高地人の服裝の主要部を構成してゐるのだと簡單に云へばそれまでである。breacan-féile とは Kilt と呼ばるゝ腰袴と Plaid と呼ばるる格子縞の羅紗布の上體の着物から出來てゐる。tartan の羅紗十二ヤルを二つ折りにし、その六ヤルを手際よくひだとつて帶紐(belt)で胴體にまきつけ下半分を腰袴とし、殘りの六ヤルはブローチで肩でとめ、背後に垂らしておくのだと教へられる。ひだのとりやで縞柄が表によくあらはれるやうになる。そこに着様の得手不得手がある。斯のやうに上下續きになつたものが breacan-féile と呼ばるゝものである。次の féile-beag と云ふのはタルタンの六ヤルの毛布を用ゐて作られ、ひだとり縫うて腰の周圍に革紐でくゝりつけるのであるが、兩端に半ヤード宛ひだかざりをせずにその儘に殘して、前面で重ね合はすのである。これは袴丈けのことであるから往々路上で見うける袴姿なのである

何かの催しや儀式に着飾つて出る盛裝になると愈六つかしい規則がある。洋服は簡單で經濟的で和服の如く幾種類も必要でないから輕便であり、吾々は是非衣服改良の必要があるなどと、飛んでもない議論を吐くにはもう少し歐米人の生活何か事ある時の服裝の種類と几帳面さとをよく研究する必要がある。身分ある男子の服裝が茲に述ぶる高地人の盛裝に等しき複雜性をもつてゐて、和服改良論者の口にする程の簡單なるものでないことが恐らく一般に知らるゝ日が來るであらう。餘談はさて措いて高地人の盛裝のことを少しのべて見たい。

盛裝と雖も前述のものと大差がなく féile-beag と云はる膝袴と隷屬の族門を表はす一定のタルタンの毛布の上體着と、族門の表象たる縞柄をもつ長靴下、菱形の銀ボタン附きの胴着を着る。胴着の着地は木綿のこともあり、びろうどのこともあり、タルタン織のこともある。軍人ならぬ人々は好んで緋若くは白若くは格子縞の直衣をつける。深みの淺い短靴山羊の毛皮の前袋、記章と紋飾のある廣い帽子、格子縞毛布の上體着をとめる可きブローチ、腰の周圍にくゝる帶紐及び刀帶、武器としては Claymore と呼ばるゝ双廣ろの長刀、dirk

と云はるゝ短刀、Sgian-dubh と云はるゝ右脚の靴下の裝飾ピストル、角製の火藥入、以上が高地人の盛裝である。

更に各部分について六つかしい規則を聞くと斯うである。

先づ第一に袴からはじめやう。

(一)腰袴に三種ある。clanをあらはす縞柄のもの、狩獵の時穿つもの、及び盛裝用のものとの三種である。盛儀に列する時には勿論盛裝用のドレス、タルタンを着用する。自分自身特有のタルタンを有つて居る人はまた勿論自身の特有のものを穿つのであるが、さうでない時は上半分をクランの縞物を用ひ下半分を狩獵用のものを着用するか、或るは逆に上半分は狩獵用を着、下半分はクランの縞物を用ふるか、二種取り合はせて着用する。高地人には既に述べた如く隸屬するクランと、單系血族である家族の小團體なるセプト(sept)とを兼有して居る者がある。而してセプトをあらはす縞柄が存在する場合がある。然し時にはセプトとして何等特定のタルタンをもたぬ場合もある。クランズメン(clansmen)にして自己一門のセプトをあらはすタルタンを有たぬ場合はクランのタルタンを用ふるのである。盛裝のドレス、タルタンの場合には必ずキルト(腰袴)プレイド(上體着の毛布)ホーズ(長靴下)の三揃は缺かしてはならないのである。

(二)上體着の毛布　これは既に長さ巾の説明をなしたが、長くて肩掛け用のプレイドと方形のショール型のプレイドとの二種がある。四角なショール型のものは舞踏の際着用さるゝものである。從つて長いプレイドは刀帶の上にかぶさるやうに着用されるものであつて、舞踏室では之を脱き去られればならぬ。而して腰袴も長靴下も共にプレイドと釣合つたものでなければならぬ。

(三)帽子　男子用なるに拘らず bonnet と呼ばれてゐる。廣い青色のものであつて、其の形 Balmoral 帽に似たものと "Glengarry" と云はるゝボンネットがある。後者は大昔からのものでなくて百年以前から出來たものだと云はれて居り、正式のものでないが今日は併用されて居るのである。着用者のクランをあらはす標語付きの紋章を附け、時にはその上に尙クラン又はセプトをあらはす常綠樹の記章をつけて居る。

(四)ガータ　巾一吋ばかりの緋色の毛編みのレイスであつて模樣及び結び方は一定してゐない。然し Snaoim garrain と呼ばるる特種の結び方がある。薔薇飾りをつけたガータは近代に出來た工夫であつて正式ではない。

(五)ダブレット　これは時にはジャケツと呼ばれてゐるものであつて綿布のこともあり、びろうどのこともあり、或は斜に裁つたタルタンで作られて居ることもある。いづれにしても高地の特徴をあらはす縞模樣のものでなければならない。最も古い型のものには Cóta-géarr と呼ばれる直着(ダブレット)がある。普通吾々も知つて居る燕尾服(Swallow tail)に似たものであるが、燕尾が短く裁ち切られて居り、寧ろ狩獵服(ハンチング)に似たものである。さうして必ず高地の特徴をあらはすポケツトの覆ひ(flaps)とカフスとをつける。ボタンは菱形かダイヤ形でなければならぬ。軍人はボタンを悉くはめて居る形式をとり、文官はボタンをかけぬ開きダブレットである。

(六)Sporran(前袋)　腰前にぶら下げて居る前袋は山羊の毛製であることは既述の通りであるが、毛色は黑なることあり白なることあり、又は灰色なることがある。また房飾りの附いてあることもあり、無いこともあるが、房飾りのある方が整つた形式である。

袋の口金具にはクランをあらはす標語と紋章とがあり、裝飾の構圖はケルト式であり、何れもブローチやベルトやバックル(しめ金)の裝飾意匠と一致するものでなければならぬ

(七)靴は何れも短靴である　時にはしめ金を用ゐて居ることもあるが、その時はベルトや他のしめ金の裝飾と一致したものでなければならぬ。

(八)ベルト　主要なるものは刀帶であるが、黑皮製で紋章があり、飾りのしめがねあるものを用ふ。

(九)長刀(Claymore)　刀身に二重溝があり、欄(つか)は籠目式のもので服裝に相應するタルタンの毛布か緋の絹布で裏つけてある短刀(Dirk)も亦適當な模樣と正規のケルト式の裝飾を着けたものである。Sgian-dudh は右脚の靴下に着けてある飾であるが、これ亦短刀の意匠と同じ種類の意匠裝飾をつけてある。

(十)ピストル　ピストルは誠に舊式のもので、今日から見るとおかしい程舊式のものである。單に一つの筒で筒先から塡充するものであり、丸をつめこむ棒(ramrod)まで銃身につけ添へてあるものである。右側に角製火藥入れを下げてるがその口は前部に向けてある。

實に細々した裝飾までが何れもクランを象徴し、全體に亘つて釣合ひのとれたものである。種々のしめがれ、前袋の口金、帽子の紋章、刀帶及刀の裝飾、ブローチ等その大小を問はず一致した入念の裝飾が施されて居るのを見うける。

十八世紀(一七四七年)になりて高地地方のクランの勢力を抑壓する爲めに英國政府はクラン制度を禁止し、タルタンの制服さへ着用することを禁ずるに至つた。今日では如何に高地人と雖も交通機關の發達、及び經濟組織の變化の爲めに、祖先傳來の舊い型を固守することが出來なくなり、只何かの儀式の時若くは博物館に於てのみ見るを得るまでに高地人の昔しの盛裝を見る機會がなくなつたのである。その武器に於て既に時代遲れであり、實用的に何等用をなさず、之を用ふるも單に裝飾に過ぎなくなつて居る。若し吾々がこれを見んと欲するならば蘇國人の聯隊に行つてその盛裝の軍服を見る以外にこれを見る機會を得ないのである。余が旅行中つく〳〵感じたことは昔剛健と苦闘とを續けて來た高地人の天地に運河が作られて汽船が通ひ、鐵道が黑煙を吐いて彼等の狩くらの夢を醒まし、山間の道路にも自動車がガソリンの臭を殘して疾驅する今日、高地人の服裝も亦今日の時代に適すべき進化をなさずんば廢滅の民族となつて史上に墳墓の記錄を遺すに過ぎなくなるであらう。果せる哉之を地方人に糺すと誠に其通りである。「開く處に依れば日本も亦傳來の服裝が社會生活の變化につれて洋裝に變へんとしてゐるではないか、蘇國のみが舊式を固執して滅亡の民たることを欲せず」と飛んだ處で蘇國人から逆襲を喰つたが誠にその通りであると答へるより他に辭がなかつたのである。以上くだ〳〵しく高地人の服裝のことを述べたが、往々邦人にしてタータン、キルのモデルをエヂンバラ市あたりで買つて來て得意顏に蘇國通をふりまかんとする人あらば服裝に關する全部を知る必要があるのである。